



MY ACTION

Vol. 22

生物多様性を “感じる”

解剖学者

養老 孟司

YORO TAKESHI

PROFILE

1937年神奈川県出身。東京大学名誉教授。同大学医学部解剖学教室教授を務め、95年に退官。2009年、環境省「地球いきもの応援団」に就任、「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」の国内広報活動に参加。ベストセラーになった「バカの壁」（新潮新書）ほか著書多数。



皆さんは「生物多様性」と聞いて何を思い浮かべますか？地球上には、いろいろな種類の生き物がいる。頭では何となく理解した気になっているかもしれませんが、実際は、よく分からないという人が多いのではないのでしょうか。

私はそもそも、「生物多様性」という言葉自体に矛盾を感じています。なぜなら、「多様性」と言っておきながら、それを一つの単語で表現しようとしているのですから。地球上には、菌類から人間まで、あらゆる生物が共存している。周りを見てください。何一つ同じ“モノ”はない。そう、生物多様性とは、言葉ではなく、あなた自身の“感覚”を使って初めて理解できることなのです。

私は、昆虫採集が好きでよく森に入りますが、国によっても、季節によっても、出会う昆虫はすべて違いま

す。そうやって、自然の神秘を肌で感じているのです。

ところが、都会の生活はどうでしょうか。車は舗装された道路を走り、電車は時間通りにくる。私たちは、文明を使って人工的に作り出した“秩序”の中に生きています。でも、秩序はタダでは生まれません。その代償として、どこか別の場所では“無秩序”が生まれているのです。

例えば、都会の野良犬を保健所で保護し、飼い犬をすべて鎖でつないだことで、田舎の畑はサルやシカやイノシシに荒らされるようになってしまった。自分たち以外の生き物を排除して発展してきたわけですから、人間はそんな無秩序には気付きもしないでしょう。生物多様性を本当に理解するためには、虫一匹いないような無機質な会議室で議論するのではなく、まずは自然の中に身を置くことが必要だとは

思いませんか。

地球上の生物が直面している危機は、言うまでもなく、私たち人間に原因があります。昔の人は自然に依存して生活していましたから、森が荒れる前に木を切ったりと、自然と共に生きる方法を知っていた。ところが、今はどうでしょう。文明と引き換えに、物事を“感覚”で理解する能力を失ってしまった。そういう意味では、人間の進化は後退しているともいえます。

私が言いたいことは一つ。1日15分でいいから、人間が作ったものではないモノを見てほしい。現代の若者のインターネットの利用時間は、1日平均6時間とも聞きます。森に入って、鳥のさえずりに耳を傾けてください。太陽の光を受ける葉っぱを観察してみてください。そのようにして、私たち人間が進むべき道を、あなた自身の“感覚”で見つけてほしいのです。